

平成16年度 大学院工芸科学研究科 秋入学宣誓式
学長告辞

本日、京都工芸繊維大学大学院に入学されました博士前期課程五名、博士後期課程七名の皆さんに対し、京都工芸繊維大学を代表して心から歓迎の意を表します。今日、研究者を志向する若い新しい力を迎え入れることができたことは、京都工芸繊維大学にとって、大きな喜びであります。

皆さんは、これから学部や修士課程で身につけた知識や能力を基に、より高度な研究に取り組むことになります。それによって、専門分野において独立した研究者としてまたは高度な実務家としての能力を涵養し、社会で活躍する基盤を得ることになります。そこで、これから始まる大学院での研究について、研究者の評価という視点から少し助言させていただきます。

皆さんもすでにご存知のように、昨今、社会のあらゆる分野で「評価」の大切さが言われるようになり、評価のあり方が社会システム改革の推進力になっています。勿論、大学や公共団体も例外ではなく、外部評価・自己評価が強く求められ、それに従って、改革が行われています。また、そこで働く個人に対しても評価が求められ、評価結果が個々人の処遇に反映されています。

しかし、評価は、最近になって始められたものではありません。評価は、目標達成の意欲を高め、組織の活性化を促すためのものであり、また組織あるいは個人の発展のために本来的に必要なもので、古くから行われているものです。

では、何故今、評価が社会現象化しているのでしょうか。これは、従来の評価体系が時代の変化に対応できなくなり、評価が本来もっている機能を果たせなくなったからです。

この二十年の間に起こった経済圏のグローバル化、IT化による情報の広域化、急激な技術革新による産業構造の変化、多様な価値をもつ国々の交流などによって社会構造が大きく変容しました。しかし、多くの評価体系は従来のままで、社会の構造変化に対応できていません。このため、新しい時代にふさわしい評価体系の構築が緊急の課題となっているのです。このことは、研究の世界においても例外ではありません。

皆さんは、研究者としての能力を身につけるという目標をもって本学に入学されたわけですから、今日からは、皆さんも研究者として、評価の対象になります。

では、研究者は、どのような能力が求められ、どのような視点から評価されるのでしょうか。実験的研究を例にとって、研究の段階と研究者の評価を考えてみます。ここでは、実験的研究に考察を限りますが、理論的研究や作品制作に関わる研究にも同様のことが当てはまると思います。

さて、実験的研究においては、まず最初に、検証すべき課題が設定されなければなりません。この課題設定は、研究開始の第一歩です。従って、まず、研究者の基本的な能力としては、各自の専門領域の中で、解くべき課題を発見し、現存の知識体系の中に位置づけるという能力が求められることになります。課題設定は、単なる思い付きではできません。課題を現存の知識体形の中で位置づけるためには、専

門分野の研究の推移に関する深い知識が不可欠です。従って、課題設定は、研究の初心者の場合、指導教員によって与えられることが多いと思います。しかし、プロの研究者になるためには、この能力を身につけなければなりません。

研究の第二のステップは、課題を検証するために、理解の枠組みとなる仮説を設け、実験を計画し、実行し、結果を出すことです。信頼性の高い実験を遂行するためには、最先端の実験方法の理論的背景の理解と技術の習得が不可欠です。従って、この段階では、研究者の能力として、実験装置を操作して信頼性の高い実験を遂行するための手法と実験結果の解析法の習得が求められます。研究としての修業の第一歩は、この段階から始まる場合が多いと思います。

研究の第三のステップは、研究の成果を論文として学術雑誌に投稿することによって世界に向けて発信し、専門分野で認知されることです。認知されるためには、学術誌の厳しい審査をパスしなければなりません。論文は、専門領域に通じた査読者によって審査され、採択の是非がきまります。この時、審査の基準となるのは、独創性、方法の妥当性、問題設定の妥当性、実験内容の妥当性、実験結果の有効性、学術的意義などが優れているか否かです。

研究成果が査読を経て認知されるということは、次の段階の研究に繋がるとともに、研究者としての職や研究資金を得ることに繋がりますが、それ以上に大切なことは、研究成果の公開によって知識の社会的共有・継承が可能となることです。この意味で、学術誌においては、学術的に共有あるいは継承するに値する成果であるかどうか、論文採否の基準になっているのです。従って、投稿した論文がたとえ不採択であっても、その結果を真摯に受け止め、粘り強く研究を継続し、採択への努力をつづけることが研究者には求められるのです。採択されない論文は、学術的貢献が果たせないこととなります。

研究の第四のステップは、成果が社会的評価を得ることです。研究によっては、その内容が時代や社会の要請に沿っているという理由で、すぐに高い評価を受ける場合がありますが、一方では、長い時代を経た後に初めて評価を受ける場合もあります。しかし、時間の長短はあっても、研究成果が最終的には社会的評価を受けることは極めて重要です。最近では、大学での研究の社会的貢献が強く求められており、大学としても社会と連携するために様々な試みをしていることは、各種の報道により、皆さんもよくご存知のことと思います。個々の研究者だけでなく、大学に対しても、研究活動を通して、どのように社会的貢献を果たしているかが問われているのです。特に国立大学は、研究・教育の費用の一部を国民の税金から支援していただいているので、社会的貢献を果たすことが極めて重要です。従って、国立大学に所属する研究者には、自らの研究を、社会の中で位置づけ、検証していくことが特に強く求められます。

さて、研究者の評価は、以上のような研究の諸段階の活動をいかに効果的に達成できるかで判断されます。従って、研究者の評価の基準としては、研究のレベルに応じて次の五段階を考えることができます。

第一段階の評価基準は「指導者から与えられた課題を検証するため、実験を企画し、結果が出せること」

第二段階の評価基準は「課題を検証するための仮説を立てることができること」

第三段階の評価基準は「独創的な研究課題を設定し、それを検証するための研究を遂行できること」

第四段階の評価基準は「研究組織を率いて、専門領域で独創的な研究を展開できること」

第五段階の評価基準は「学界や国家の科学技術の基本政策として新たな研究領域を提案し、推進できること」であります。

このような評価基準は、衆議の一致するところではありませんが、多くの人に広く受け入れられているものであります。

さて、本日入学された皆さんに対しては、研究者としてどのような評価がされることになるでしょうか。

研究者としての第一歩を踏み出されます修士課程に入学された方に対しては、第一段階、即ち「指導者から与えられた課題を検証するため、実験を企画し、結果が出せる」能力が、評価の標準的基準になると思います。

また、博士後期課程に入学された方に対しては、第二段階、即ち「課題を検証するための仮説を立てることができる」能力が、評価の基準になると思います。

皆さんは、今日から、このような評価が求められることを自覚し、新たな研究生生活に向けた意欲と熱意を忘れずに、不断の地道な努力によって、研究者としての能力を高め、研究者として自立できる基盤を確立してください。

そして、研鑽をつまれ、二年後、或いは三年後の各課程修了の時点では、それぞれ、第一段階あるいは第二段階をクリアするとともに、さらなるレベルアップを図ってください。

研究者としての鍛錬をされる際、もう一つ考慮していただきたい重要なことがあります。それは、皆さんが取り組まれる研究が、社会や地球環境の中でどのような意味を持つのかを常に考える姿勢です。実際に皆さんが行う研究は、個別的・具体的テーマに絞ったものになるでしょう。しかし、その中にあっても、常により広い視野に立って、自らが取り組んでいる課題が、人間やその他の生物、あるいは無生物をも含む地球環境を守り発展させる上で、どのような意味を持ち、価値を持つのかを問い続けることが、利潤の追求を第一の目的とする企業ではなく、「大学」という機関で研究するものに求められる資質であり責任でもあります。

皆さんの大学院生活が実り多いものであることを期待し、お祝いの言葉と致します。

平成十六年十月四日
京都工芸繊維大学長
江 島 義 道